

うるくの歴史と文化を語る会 会報 ガジャンビラ 第8号

発行: うるくの歴史と文化を語る会
発行人: 當間一郎 編集人: 赤嶺和雄
〒901-0153
那覇市田原4-1-1 JA おきなわ小禄支店内
TEL.(098)857-1175 FAX.(098)852-1486



字宮城の字誌編纂

上原 健秀

現在、宮城自治会では字誌編纂作業をすすめている。これまで「字誌」を作ろうと言う声はあってもなかなか実行できなかったが、自治会の活性化に伴い多くの会員が自治会活動に積極的に参加するようになり、字誌づくりのムードが高まって、平成16年4月から「字誌編集委員会」が発足した。編集委員長に大嶺雅則氏が選出され、総務部、産業経済部、教育文化部の三つの作業グループに分れて、編纂作業が進められている。百姓村には歴史的記録や資料がなく、長老達からの聞き取り調査を行ったが、もう10年早ければと言う声も聞かれた。素人による字誌編纂は、途中で頓挫したり、完成まで10年以上かかると言う話も聞いてるので、内容的には不備でも、短期間に完成させようという編集委員長の強いリーダーシップにより作業が進められ、本年9月出版を目指している。

現在各字でも字誌作りが進められているが、たまたま「明治時代の地籍図みつかる。」「103年前の小禄地図発見」等と2月2日の新聞に宮城の地籍図が取上げられ、今回「宮城字誌」の一部を紹介することになった。



字誌編集委員会



先輩方からの聞き取り調査



宮城地域の航空写真 ①レーダーサイト、②宮城御嶽、③宮城自治会館、④前井戸、
⑤国道331号バイパス、⑥国道331号(旧道)、⑦那覇空港滑走路

マースカー

字名の由来

グシナーグスク

宮城にいつ頃集落が発祥したか、明らかではないがその昔「グシナーグスク」と呼ばれていた。卒宮城の由来は「南島風土記」によると、一卒宮城は最も奇様な字形であるが、検地帖に単に宮城村となり、具志に隣り合っている。恐らく二村併称の例によって、具志村に隣る宮城村の意味で本来具志宮城と唱えたものであろう。卒の字は辞典にもないが、おそらく犂の略字で大牛の意である。「グーシ」「グーウシ」の義であろう。一と記してある。

犂という字は、大漢和辞典によると「シウ」「シユ」と読み、意味は「牛があえぐ」「牛が鳴く」となっている。

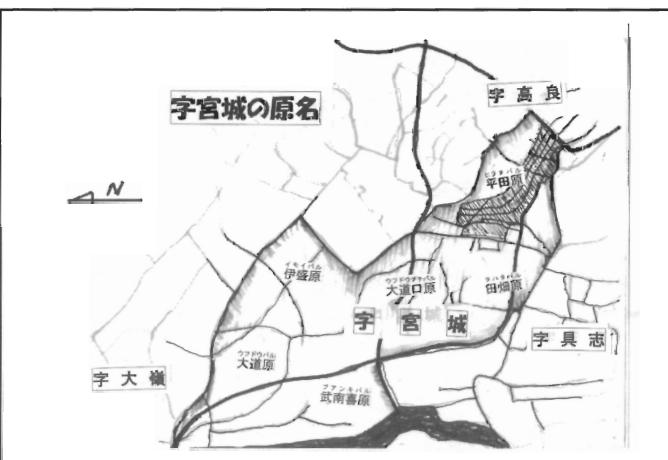
先祖が「具志」と「宮城」両村の地頭職だったという佐辺氏（旧姓卒宮城）の口碑によると、昔両村は闘牛が盛んなところだった。ある日、首里の偉い人達を招いて闘牛を見せたところ、ある人物が「具志」の地名について提言したという。その内容は「闘牛の盛んな土地柄」で、どうせ「具志」なら「ゲート、ミート」の「グーウシ」にして、文字は「双」と「牛」を結びつければよいと言ったという。



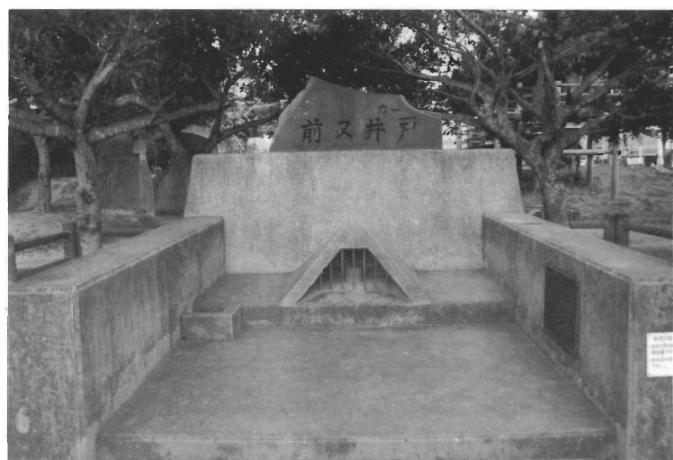
宮城御嶽



宮城御嶽の祖神堂



宮城の原名



ウブガーメーヌカー
宮城の産井前ヌ井戸

集落の地形と環境

宮城の地形は、旧小禄村の南西に位置し、北西に字大嶺、南に字具志、東に字高良と接し、西は慶良間諸島を望む南支那海に面している。六つの小字で構成され、形はイカに似ている。大道原、武南喜原、伊盛原が三角のイカの頭の形で、大道口原、田畠原、平田原がイカの胴体部分の形をしている。

風水発祥の中国では、集落にとって良い地相とは背水臨水と言われ、背後に山（森）があって前方に川、水田（水）がある場所とされている。

宮城の地形を見てみると、集落は平田原の丘の南側に位置し、北の方にバンク、御嶽、その背後に畑が続き、更にその後方の小高い所に童墓、隣の丘陵に宮城各門中の墓が東から「上ン門門中」「赤嶺ヌ前門中」「安次嶺門中」「上原門中」「大屋門中」「内神堂門中」その西側にやや離れて「堀川門中」「新垣門中」「西門小門中」「西安次嶺墓」が連なり、さもご先祖様が東から西まで宮城の集落を抱きかかえるように見守っているようであった。

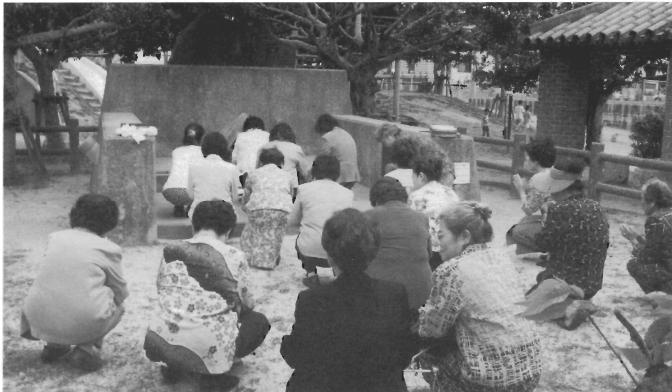
夏は涼しく冬は暖かく、集落の中央の前道を流れる川は西の大通口までのびて静かで、のどかな集落であった。西の方に慶良間の島々と瀬長島が夕日に映える景色は一幅の絵のようであった。

ムラウチ 村内の各屋敷は樹木や竹に囲まれ、道路は東から後道、中道、前道と3本の道路が集落内を通り、上段の方に御嶽、隣に大屋、安次嶺、堀川と門中の元家が並び、その下段に各家屋敷が整然と並び、各屋敷にはシーカーラー、ベンシリー(グアバ)、枇杷、桑の実、クルチ黒木の実等いろいろな木の実がたわわに実り、ソーミナー(メジロ)、チョッチョー等いろいろな小鳥が飛び交う静かな桃源郷であった。

集落の入り口には那覇～糸満を結ぶ県道が通り(明治41年完成)、軌道客馬車が大正7年に開通し、通りには商店、理髪店、染物工場、薬屋、蹄鉄場(馬のひづめに打ち付ける鉄の金具)等が立ち並び、更に入り口広場には、臨時の魚売りが糸満、与根、アンジナ(瀬長)から集まり、朝市として賑わった。

門 中

宮城には、11の門中有ある。一番古い門中が①大屋門中で、その昔中城城主護佐丸の種を宿した今帰仁出身の女性が宮城にやって来て男子を出産した。その方が御嶽に根神として祀られている。大屋門中はその子孫で、ウマチーには中城村字泊にある大屋本家と護佐丸の墓を拝んでいる。この大屋門中から分家したのが、②内神堂門中、③西門小門中、④上門門中である。⑤堀川門中は、豊見城市の長嶺按司(豊見城市的長嶺城)の子孫と言われている。⑥安次嶺門中は、その昔大屋門中、堀川門中と並び宮城で大きな役割を担った門中であるが、何故かそのルーツは不明である。⑦上原門中は、豊見城名嘉地の越地門中が元祖である。⑧親富祖門中は、具志の仲村渠門中の三男腹と言われている。⑨安座名門中も、具志の仲又前門中の血筋を引いている。⑩赤嶺門中も具志の沢岐門中の分家と言われる。⑪新垣門中の元祖は、福井県出身者で尚寧王代に、久米島に渡り、桑の栽培、カイコの飼い方、マユの引き方等を指導した。長男腹は読谷、次男腹は泊にある。



旧暦三月三日の宮城婦人会の挙み

農 業

旧宮城部落における農業は、イモ、サトウキビを基幹作物として、それにキャベツ、冬瓜、西瓜、大根等の蔬菜を栽培していた。

【イモ栽培】イモは全農耕地の約半分以上の農地で栽培されていた。麦や粟に比べ台風被害を受けず安定して収穫出来るので、主食となっていた。また、那覇の市場にも売り出され、酒造製造所や澱粉の製造所でも利用された。

【キビ栽培】砂糖キビは、最も頼りとする換金作物で、殆どの農家で栽培されていた。

大正の頃、宮城には5つのサーターラー(製糖小屋)があった。

農家は大いにキビの増産に励んだが、キビは自然災害や経済不況等の影響を受けやすく、大正末期から昭和初期にかけて起こった不況の影響で、大きなダメージを受けて、昭和7年にはサーターラーも3つに減っていた。

【移出用蔬菜】キビ栽培は、現金収入源としては乱高下が激しく、不安定だったので次第に移出向け蔬菜の栽培へ転向していく農家が増えていった。各部落においても蔬菜栽培の普及奨励が目立つようになった。

特に小禄・豊見城・南風原・真和志等の各村では指導圃を設けて移出蔬菜の栽培を奨励すると共に出荷組合を組織して各農家の便宜をはかった。その結果キビ面積が減り、蔬菜類の作付面積が大幅に増加した。

わが宮城でも作付面積の拡大や出荷組合等をとおして増産に努めた結果、特にキャベツの出荷状況は小禄村内でも上位にランクされる生産量を誇っていた。

養 豚

各農家とも家畜や家禽を飼っていたが、特に養豚が盛んだった。イモの栽培が盛んだったので、イモを飼料として飼育しやすい「島豚」が殆どの農家で飼育されていた。弁所兼用の豚小屋(ウワーフール)も他の家畜小屋と共に屋敷内にあるのが普通だったが、衛生上の問題があり、養豚場取締り規則が出来て、新設及び改造は警察への届け出が必要となった。

ウルククンジー

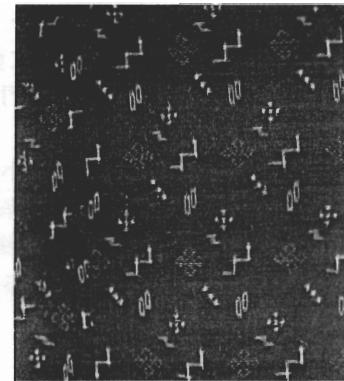
「小禄・豊見城・垣花三村、三村のアンガーターがすりとうてい布織い話、綾まみぐなよ、むとかんじゅんどー」で知られている島唄の「布織話」は「琉球紺・ウルククンジー」のことである。

戦前の中禄村には、7軒のウルククンジーのスミヤ(染屋)があったが、そのうちの一軒が宮城の新安次嶺(屋号)にあった。新安次嶺は、大正12年頃に家内工業として染織業をスタートさせ、昭和8年頃に「安次嶺機織共同作業所」を設立し、更に昭和16年には当間学校の付属女子補修学校の敷地内に「安次嶺染織工場」を設立して操業し、年間7百~8百反のウルククンジーを生産していた。

「ハタ織り」は女性の最高の収入源で、親達も畠仕事をさせることよりもハタ織りをすすめた。



ウルククンジー 紺 平織 絹
ピックー、ハアナ、ビーマ



ウルククンジー 紺 平織 木綿
パンジョウ、ジュジ、イチチブサーミ・ダヌー、イチチ・マルグム、トーニー、ヌチ・ヒチサギ

村遊び

明治の頃までは、村遊びが盛んで、組み踊りも演じられていた。その場所が「パンク」(野外で芝居をする場所)と呼ばれ残っている。組踊りをどこから習ったかは不明である。演目は西が「雪払い」「姉妹敵討ち」「本部」等で東が「村原」(大川敵討ち)だったと言われている。組踊りに出演することは青年たちのあこがれの的で、競い合つて、配役を選んだと言う。しかし、熱中し過ぎて、田畠は荒れ放題になった。このようなことで組踊りは途絶えてしまったが、「大川敵討ち」の勇壮な「長刀踊り」だけは伝承されている。



「パンク」拝所、後方レーダー基地内が元の場所



宮城の旗頭

フリッピン移民

宮城からの海外移民は明治40年(1907年)にフイリッピン群島へ向かった三人が始まりで、大正6~7年頃から急に増えはじめ、ソテツ地獄と言われた大正末期から昭和初期にかけて多数の方々が海外へ渡ったが、その殆どがフイリッピン群島であった。明治40年から昭和13年までの30年間に119名が送り出されているが、その中の15名がフイリッピン移民で、フイリッピンに宮城部落ができるほどであったと言う。

当時の模様を埼玉在住の上原三根生氏(大正10年生)は、次のように記している。

「昭和3年頃の字宮城の戸数はおよそ75戸だった。当時、昭和の大不況で日本本土はもとより、沖縄全県が生活苦に喘いでいた。その境遇から脱出せんがために、殆どの家庭が宅地を抵当、担保に入れ、外国行きの旅費として銀行から金を借りてフイリッピンや南米等に移民又は出稼ぎに出て行った。行き先の国で運良く稼げた人はよかったです。大抵の人は落ちこぼれ、送金も出来ず、担保抵当物件(宅地、土地)は他人に渡った。支払いに困り、娘を辻に売る羽目になった人も出てきた。この事件があって以降、字宮城は集落全体が活気を失った。周囲の村民は口を揃えてナーグシクダヤーと言うようになった。」

移民の殆どは、ミンダナオ島ダバオに入植して、麻栽培に従事した。麻が高騰した時期に儲かった人々の話を聞

いて、後からやって来た人々は麻の暴落により期待を裏切られたようである。昭和16年（1941年）日本軍の上陸により、現地人との関係が悪くなり、次に、米軍が上陸してくると日本軍と共に奥地のジャングルへ逃げ込むことになった。日本の敗戦により、全フィリピン移民は全財産を残したまま祖国へ強制送還された。不幸にして戦争や現地人とのトラブルで命を失った人々も多く、「平和の礎」に49名が刻銘されている。

【当時3年生だった上原博氏の体験記】—省略—私達家族も何時までも避難小屋に居座るわけには行かなかった。そんなある日秀松さんがフィリピン人を連れてきた。一人連れて来る予定だったが数人がついてきた。その時は一緒に出れば安全だと思って出たが、かえってそれが裏目となった。我々は数人の現地人に連れられて避難小屋を出た。そして、森林に入った山道から横10メートルくらいの場所に引きずり込まれ、機関銃の掃射を浴びせられたのである。そこで9名の方が犠牲になった。わたしも怪我をして意識を失っていた。しばらくして意識が回復したが目を開けず死人になりすまし難を逃れた。その間、現地人は再び死人を確かめてから衣類やその他の荷物を持ち去った。—以下省略—

戦時中の宮城

宮城には多くの軍隊が駐屯し、瓦葺の殆どの民家は軍隊が使用していた。①先ず、一つは海軍の「若生隊」で、宮城の北側後方の丘陵に小禄飛行場を守備する「重高射機関砲陣地」を敷設していた。隊長は宮城県出身で学徒出陣の若生少尉だった。若生隊長は部落民に色々な配慮をして信頼されていた。昭和19年夏、宮城入口に陸軍の慰安所が設けられた時、宮城の集落の県道沿いに設けることは風紀上、好ましくないと憲兵に抗議し、人目につきにくい真栄田薬屋の裏に移動させたり、また、戦況が悪化すると、宮城の人達に早く北部に避難するように勧め、区長の要請を受けて軍のトラックを手配したり、食料の手配等をした。しかし、十空襲には若生陣地が攻撃目標となり隣接した住宅が爆撃され死者1名負傷者2名の犠牲者が出了。②次に「宮崎隊」で、沿岸砲（12センチ砲）2門を備え具志側の丘陵に布陣していた。この部隊は字当間に設置された大型沿岸砲部隊の分隊で、通称陸戦隊と言われていた。③更に陸軍も駐屯していた。米軍上陸後の地上戦に備えるため、陣地構築、壕堀り、たこ壺造りに昼夜働いていた。宮城後方や前方の丘陵は、縦横に幾重にも堀り抜かれた。また、住民が掘った壕も日本軍が使用し、住民は別の場所に新たな壕堀りをした。



若生中尉の慰靈祭（昭和35年6月・豊見城市海軍慰靈の塔）



線香を手向ける宮城の皆さん

【北部への疎開】

小禄村では昭和20年2月に村内の非戦闘員を北部へ疎開させた。宮城の疎開地は名護町喜瀬、幸喜が指定された。宮城は若生中尉の協力を得て、他の部落よりも多くの人が車で疎開できた。亀川部隊や山根部隊の車で避難した住民もいた。

しかし、避難対象は戦争の足手まといになる年寄りや子供達だけで、戦争に協力出する者はぎりぎりまで残された。当時の区長も最期まで残り島尻へ逃げ一家全員亡くなられた。平和の礎には沖縄戦で亡くなった142名が刻銘されている。

【当時4年生だった宮城静子さんの戦争体験記】

一省略—激戦地になる事も知らずに南部へ移動し糸満の米須までたどり着き、とりあえず岩山の壕に避難しました。しばらくしたら、そこも爆撃が激しくなり米須の部落内に逃げ場を探して移動しました。そしてある大きな屋敷へ避難しました。そこには沢山の避難民でいっぱいに入れなく、しかたなく私達家族はヤギ小屋に避難することにしましたが、しかしそこもすでに沢山の避難民がいて中に入るのがやっとで、なんとか入り口の石造りの壁際に身を隠していました。しばらくして爆撃が激しくなり大型爆弾が本家に一発命中し、そこに居た避難民は全滅しました。また庭にも一発、ヤギ小屋の窓際にも一発落ちて爆弾の破片が窓を超えて奥の方へ飛び散り、奥に居た多くの人が即死しました。私達家族は壁際に居たため助かりましたが、母は脇腹に大きな傷を負い、もう少しで命を無くすところでした。—以下省略—

戦後のあゆみ

昭和21年（1946年）2月小禄村高良、宇栄原地域の一部が開放された。国頭方面や日本本土及び外地等から引き揚げて来た人々は、旧部落に帰ることが出来ず、この地域一帯の米軍が残したテント小屋や共同作業で建てられた茅葺小屋に押し込まれるように住むことになった。昭和22年8月頃、宮城の一部地域が開放され、それぞれ元の屋敷へ移り住んだが、昭和28年2月に宇具志尻川原（具志と宮城の間）に米軍ガソリンタンク施設建設のため、立退き命令が出て7世帯が再び高良方面へ移転した。現在の宮城地域に住んでいる者は自治会員全体の約25パーセントで、その他は未だ高良、宇栄原、具志及びその他地域に住んでいる。



合同生年祝賀会



小禄地区市民大運動会優勝記念碑

宮城自治会館

終戦直後の自治会集会は高良小学校の高棟校舎（モータープール跡）を使用していた。米軍のトタン葺き図書館を貰い受け、その材料で高良小学校近くに字事務所（村屋）を建てたが、宮城地域の一部開放に伴い前道遊庭に移築された。その後、隣接した村池を埋め立てそこにコンクリート平屋の建物を建築した。何故かその建物の名称は「宮城俱楽部」となっていた。大きな行事の場合は狭く仮設の床を設置していた。昭和55年、運輸省の航空機騒音対策事業として共同利用施設「宮城自治会館」が建設された。



宮城自治会館

明治期の地籍図

字の地籍図は戦時中、当時の頭（現在の副会長）だった大嶺三郎さんが避難中も大切に保管し、戦後の自治会長に引き継ぎ、歴代の会長も引き継いでいたが、30年前から金庫で眠っていた。今回、字誌編集委員会が資料収集の過程で、金庫から地籍図を取り出してみると、かなり痛んでいたので修復のため、専門家に相談したところ、歴史的貴重な資料だということが分かった。

この地籍図は、明治32年から36年まで行われた沖縄県臨時土地整理事業で作成された各字ごとの地籍図で、一筆ごとに所有者を確定し、金納の対象とされた。琉球廻分後も旧慣温存期といって土地の所有は認められず、王府時代の慣習で、土地はすべて公有地であり米で税金を納めていたが、この土地整理事業は、最期の地割りとも言われている。地籍図は、間切・村・字ごとに全般的に作成されたが、現存するのは早稲田大学にある浦添・宜野湾の一部と、北部（今帰仁等）の一部のみで、那覇・南部で確認されたのはこれが始めてで、大変貴重な資料となっている。



明治期の地籍図